

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	定期的に会議の中で理念の確認をし、ケアに繋げている。	「その人らしく暮らす家」というホームの理念が各フロアの入口に掲示され来訪者にもわかりやすくなっている。職員はホーム会議で理念について話し合い、具体的に「その人らしさ」を考えて支援に取り組んでいる。家族に対しては利用契約時にパンフレットを用いて説明している。理念にそぐわない言動が職員に見られた時には、その場で管理者が助言している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍により、行事等や日常的な交流を持つことは出来ていないが声をかけ合ったり、直接様子を伝え合う等し繋がりがながら暮らしていけるよう努めた。	自治会協力金を納めて地域との交流を図っている。平常時には地区の夏祭りや文化祭等に参加したり、また、ホームでの収穫祭や夏祭りには地域の人々に声をかけて交流を深めている。現在はコロナ禍の中にあり行事が中止となり交流できない状態であるが、収束後には再開する予定である。十分な感染対策をして福祉大生と看護学生の実習を受け入れたところ、利用者の満面の笑顔を見ることができたという。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	看護実習、職場体験の受け入れを積極的に行っている。又、見学希望・相談にも乗っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議で、取り上げられた検討事項について話し合い次に繋げている。現在取り組んでいることも報告し意見を頂いている。	家族代表、区長、副区長、2地区の民生委員、介護相談員、諏訪広域連合職員、ホーム理事長、管理者、職員の出席で定期的に開催しているが、コロナ禍のために書面での開催となっている。利用状況、現在の取り組みや活動状況をお知らせして、電話などで質問・意見を頂き、別紙でその回答を報告し相互の関係の継続を図っている。文書による開催で意見を出しやすくなった方もいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	必要に応じて、連絡連携を取っている。	市町村担当者とは必要に応じて連絡を取り合っている。介護認定更新調査はホームで行い調査員が来訪している。例年、市介護相談員の来訪が月1回あり、その情報を支援に活かしていたが、現在は中止している。コロナ終息後は再開される予定である。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月1回行われるホーム会にて身体拘束についての指針の読み合わせ、身体拘束についての勉強会を行い、正しく理解すると共にケアの見直しを都度行い、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	ホームの方針として拘束のないケアに取り組んでいる。日中、玄関は開錠されている。職員は心配りをしているが玄関前の道路は車が多いため玄関チャイムを使用している。外出傾向の強い方は職員と一緒にベランダやホーム周辺を散歩して気分転換を図っている。現在は拘束を必要とする方はいないが、身体拘束に関するホーム独自の指針を会議で確認しあい勉強会を行い、拘束をしないケアに取り組んでいる。	

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修、ホーム会にて学びや確認する機会を持ち、職員一人ひとりが理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	家族から相談があった際には関係機関に繋げる等している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時の契約の際は、入居者や家族と話し合いをし理解納得を得られるよう努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や家族訪問時には意見を出して頂き、運営に反映している。利用者の方から意見を聞く機会を作ったり、思いを伝えることが困難な方からは表情や仕草等から汲みとるようにしている。	半数の利用者は意見や要望を伝えられる。言葉を発しない方が数名おられ、意思表示が難しい方はその時の表情や反応を見ながら推察して要望等を受け止めるようにしている。今までほとんど話さなかった方がうっすら笑みを浮かべたり、ひと言「おやすみ」と言ったり手を振ることができる等、少しでも変化が見られよう支援に努めている。家族の来訪はコロナ禍前は毎日から月1回と様々で、来られた時は様子を伝えて意見を伺っていた。家族の面会は制限されていたがクリーンルームが設置され、徐々に短時間の面会が実施できるようになった。現在は中止しているが、家族会があり、年1回定例で開催され多くの家族の参加があり、また、ホームの敬老会にも参加し家族同士のつながりを深めてきた。広報せせらぎの家を年4回発行し、月1回管理者による手書きの手紙で様子をお知らせして家族から喜ばれている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ホーム会を月1回開催し、職員の意見を出してもらっている。個人面談も年1回行い、職員の意見を反映するように努めている。	コロナ対策として密を避けるために、職員全体でのホーム会議を行い、また、数名ずつでのフロア会議やミーティングでの意見交換を行い、課題の共有化を図りつ支援の向上につなげている。法人として人事考課制度があり自己評価となる振り返りを行い、理事長・管理者による個人面談が行われ、職員も意見を出せる機会となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者はこまめに職場に来ており、業務の把握に努めている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ケアの実際と力量を把握したうえで、適した外部研修を受ける機会を作るよう努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍により交流会等の参加は出来なかったが電話等により情報交換している。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前より、本人に直接お会いし話を伺い、不安や要望等の把握に努めている。入居後も安心できるような関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前より家族に見学してもらったり、面談を重ね不安要望等を聞き信頼関係作りに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族の思い状況を十分に確認し柔軟な対応をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	入居者に教えてもらう場面が多くもてるように工夫している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とこまめに連絡をとり、本人を支えていけるよう努めている。又日頃の状態をこまめに報告すると共に本人からの手紙や電話により関係が途切れないようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないう、支援に努めている	コロナ禍で家族の方以外との交流は難しくなってきたが、入居して間もない方は馴染みの人との関係が途切れないようにしている。	友人の来訪はあるがコロナ禍のために窓越しの面会となっている。手紙やホームの電話でやり取りができる方もいる。年末には利用者の年賀状作成を支援する予定である。	

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係が上手くいくように職員が調整役となり、皆で楽しく過ごす時間を作っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了された方も家族からの相談にのっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の発した言葉や表情・行動から思いをくみ取るよう努めている。家族とも相談しながら思いや意向の把握に努めている。	半数の利用者は自分の意向を伝えることができる。その他の方には声がけしながら表情や態度から気持ちを受けとめ支援につなげている。職員はフェイスシートも参考にすがその情報だけにとらわれることなく、まずは自分が関り、利用者を知ることで利用者の思いに近づけるように努力している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	普段の会話や家族から継続的に情報を得ている。又、入居前より必要な情報を得るようにしケアに繋げている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを理解し、その日の状態を全員で把握するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンスで利用者の状態を把握したり、職員・家族で意見交換をし利用者主体となる様な介護計画作成に努めている。	職員は1~2名の利用者を担当し居室の整理整頓から生活全般にわたり支援している。介護計画はユニット毎のカンファレンスで話し合い、3ヶ月に1回見直しをしている。本人や家族からその都度意見を伺っている。状態に変化が見られた時には随時見直しを行い、一人ひとりにあった支援に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	食事・水分量・排泄等の身体状況及び日々の暮らしの様子が言葉・エピソード又、職員の気づきや状態変化について記録し、職員の情報共有を徹底すると共に介護計画の見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診の付添いをしたり、配食サービス等本人や家族の状況・要望に応じている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員、介護相談員の方も運営推進会議の委員に入っており、情報交換している。訪問美容の活用をしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人や家族が希望するかかりつけ医となっている。必要に応じて歯科往診も受けられるよう支援している。	利用前のかかりつけ医を継続されている方は若干名で、家族が受診に同行したり、往診も受けている。その他の方はホーム協力医を希望し、月2回の往診を受けている。歯科については家族と相談しながら協力歯科医の往診と受診に対応している。職員の中に看護師が3名おり、日々の健康管理から体調変化の対応まで、24時間体制で行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	体調変化など見逃さないよう早期発見に努めている。介護職員は状態変化を看護職員に報告し共に対応している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した際には、医療機関に情報提供している。医師・家族と話す機会をもち、早期退院できるようアプローチしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人や家族の意向を踏まえ医師・職員が連携を取り安心して納得のいく最期を迎えられるよう随時、意思を確認しながら支援している。状況変化の度に、本人・家族・医師・介護職員とで話し合いを積み重ねて安心と納得を得られるよう努めている。	利用契約時に重度化に関する指針を説明し本人・家族の意向を確認している。状態の変化に応じて本人・家族、医師、職員で話し合い、希望に沿った支援に取り組んでいる。ここ2年で8名の看取りを行い、開設以来20名以上の看取りを経験している。看護師を中心に全員で体制を整え、最期の時を迎えている。毎回振り返りをして課題も共有している。看取り期は急に来るわけではなく、日々の生活の流れの中にあることと考え取り組んでいる。利用者も含めて全員でお見送りをしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者急変時マニュアル等で周知徹底を図っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年二回、入居者と共に避難訓練を行っている。地域の協力体制については運営推進会議にて都度お願いしている。	年2回防災訓練を実施している。火災想定の際は消防署職員も参加し助言を頂いている。土砂災害を想定した訓練では、同じ法人の病院まで車を使って利用者を移動する訓練を行う中で課題も明らかになったという。当ホームは土砂災害警戒地域となっているが、家族、地元の方、消防団等の協力については運営推進会議で検討して具体的に進めていく予定となっている。	

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	馴染みの関係の中でも一人ひとりを尊重した声掛け対応をしている。	名前は本人・家族の希望に合わせて苗字か下の名前に「さん」付けでお呼びしている。馴染みの関係でも言葉遣いや声かけには気をつけている。人格の尊重やプライバシー保護に関する研修も受けて意識を高めている。職員の声が大き過ぎたり、気づいたことがあればその場で注意し合い、利用者が気持ちよく過ごせるように配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者の関心・嗜好を見極めた上で自己決定が出来るような場面を作っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	体調やその日その時の本人の気持ちを尊重し、一人ひとりのペースを大切にした支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段から化粧やお洒落が出来るよう支援している。又、行事、外出の際は正装して楽しんでもらえるよう取り組んでいる。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者に合わせたメニューや季節を感じられる食材を多く取り入れている。おはぎ・五平餅作りなど一緒に作っている。又、職員と入居者が同じテーブルを囲み楽しく食事がとれるようにしている。	自力摂取、一部介助、全介助の方がほぼ3分の1ずつという状況である。献立はホーム栄養士が立て食材は配達されている。職員も利用者と同じ食卓に着き楽しい時間を過ごしている。利用者のお手伝いについては野菜の皮をむいたり切ったりできる方が3分の1、食器洗い・拭きは若干名の方ができている。たこ焼きやおはぎ作りなどには積極的にお手伝いをしていただいている。正月などの特別食や誕生日などの行事食も手作りして楽しんでいる。「コロナ禍だからこそご馳走を食べよう」と職員が働きかけ、正月はおせちとお屠蘇を準備して楽しく過ごされたという。ホームの畑でとれた野菜や家族からの差し入れもあり季節感を味わうことができている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとりの摂取量、その日の体調等を把握し栄養バランス、食べやすいもの等を考えた食事・水分を提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	入居者一人ひとりに合わせた口腔ケアを毎食行っている。		

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握し、出来る限り、トイレでの排泄が出来るよう支援している。	自立されている方・全介助の方が若干名ずつで、あとの方は見守りや一部介助が必要な状況である。排泄表でパターンを把握し個々に合わせて声かけや誘導を行い、トイレでの排泄に取り組んでいる。十分な水分補給と乳製品を提供することで便秘予防につなげている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄パターンを把握し、十分な水分補給と乳製品等提供している。又、毎日のテレビ体操により便秘対策に繋げている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入居者の体調や希望に合わせて入浴してもらっている。入浴時は歌を唄ったり季節に応じた薔薇、菖蒲、リンゴ湯等楽しく入浴できるようにしている。	全利用者が何らかの介助を必要とし、3分の1の方は全介助という状況である。基本的には週2回の入浴を行っているが、希望により1日おきに入浴される方もいる。入浴を拒む方には時間を変えたり、声かけを工夫して入浴できている。季節により「バラ」「菖蒲」「リンゴ」「大根」湯等、楽しく入浴できるように工夫もしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活リズムや体調・希望等も考慮し、休息がとれるようにしている。夕方からは安心して眠れるよう穏やかな時間を過ごせるようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を個人ファイルに入れ、確認するようにしている。変更時には内容・副作用について申し送りをし、職員間で共有・状態の変化等の把握に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	畑作りでは野菜の育て方を教えてもらったり、毎日畑の様子を見に行ったり、草取り、庭木の剪定をもらうなど一人ひとりの力を発揮してもらえるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりの希望に沿って散歩や外気浴、ドライブに行っている。	外出時、半数の方は車いす使用で、自立の方が若干名、あとの方は手引き・杖・歩行器を使用して移動している。コロナ禍にありレクリエーション外出は難しく、ホーム敷地内の花壇や畑づくりをしたりベランダを歩くようにしている。室内ではテレビ体操を取り入れて体力の維持に努めている。コロナ収束後には外出計画を立て、ドライブ等に出かける予定である。	

グループホームせせらぎの家・1階

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ご家族より預かり事業所で管理している。意向がある方には、ご家族と相談しながら所持金を持っていただけるようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話をかけたい希望があれば気兼ねなく電話できるよう配慮している。日常的に手紙を出せるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花を飾ったり、行事の写真や家族との写真を飾る等し、家庭的な雰囲気大切にしている。音や光・温度湿度や囲い等には十分配慮している。	玄関前には利用者がお世話をしているベコニアの鉢が並べられ、見事に咲き誇り迎え入れてくれた。ホーム建物を取り巻くようにベランダとテラスが設置されて利用者のくつろぎのスペースとなっている。玄関フロアや廊下の壁には絵手紙や利用者の様子を写した写真が飾られている。ホール兼食堂には3つのテーブルが程よい間隔で配置され、またソファがあり自由に寛がれている。キッチンからは利用者の様子を見渡すことができ、木造建築による木のぬくもりも感じられる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	スタッフルーム前・ベランダや玄関先にはゆっくり過ごせる場所を設けている。フロアにはソファを置きゆっくりに寛げる空間を作っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時には、本人や家族と相談し使い慣れた物や馴染みの物を置くようにしている。家族との写真や作品等飾っている。	居室入り口には小窓があり、そこにお気に入りの絵やぬいぐるみが飾られて自分の居室がわかりやすくなっている。室内にはクローゼットがあり整理整頓されている。使い慣れた机や家具、掛け時計が自由に持ち込まれ、位牌を持って来られている方もいる。壁には利用者や家族の写真、色紙や書道作品が飾られ、居心地の良い思い思いの生活空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	入居者がホーム内を安全に移動できるよう状況に合わせて環境整備に努めている。		